



Title	英語の論理 : その教え方と学び方
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外大英米研究. 1995, 20, p. 15-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語の論理

——その教え方と学び方——

〈序〉

上 野 義 和

この三人のプロジェクトは約1年前に始まった。そのきっかけは、現在愛知県高等学校で英語の教師をしている元ゼミ生が、英語と日本語の対照研究の卒業論文を書いている時にぶつかった「論理性」ということが、私の研究室で行われている学部・大学院卒業生対象の英語学談話会（月2回）でトピックの一つになったことにある。その時のメンバーは私を含めて12名であったから、結構活発な討論や意見の主張があったが、最終的には具体的に言語を英語と日本語に絞り、タイトルを「英語と日本語」、「英語の論理」と定め、期限つきで400字詰原稿用紙10枚以上のペーパーを書くいう成り行きになった。結局全員が約束通りペーパーを提出したが、そのうち、私、金杉、平井の計3点が全員の賛同を得、また私自身も金杉、平井のペーパーは、学生、英語教師、一般社会人のいかに問わず、かつて英語と接点を持った日本人および、現在も英語と接点を持っている日本人に対してある種の強いインパクトを与える内容をもったものであると判断し、是非活字にして英語学習の一助にしていきたい、またその必要性があると感じたものである。

金杉高雄の「X rob Y [of Z] 構造」は本格的な英語学論文である。英語学習者なら誰しも経験したであろう、‘steal Z (from Y)’ (YからZを盗む) の構文を教わった後に学習する構文であるから、特に我々日本人には奇異に感じられる構造である。その理由は明白である。‘rob’ は「奪う」の意味であるのに、その被害者を示す名詞（句）が何故その直後に置かれるのか、また ‘of’ は日本語の「から」に相当するはずなのに何故 ‘of’ のみ許される唯一の前置詞なのか、ということであろう。私自身も同じで、高校生の頃

に英語の先生にその理由を尋ねたことがあったが、その答えは「英語ではそうなっているから、とにかくそのまま暗記しなさい」ということだけであって、全く釈然としなかった経験がある。しかし、当時は私自身英語学習の初心者にすぎず、その説明（というより、正確に言えば「暗示」）に従うかはなかった。このような説明（？）は現在の最先端をゆくとされる言語理論の一つでも同じで、「of」挿入」という名の規則を設けて統語論上は処理しているものの、くり返しになるが、何故「被害者」名詞（句）が‘rob’に後続するか、また何故多くの前置詞のうちから唯一‘of’のみが選択されねばならないかの論理的（＝筋の通ったもつともな）説明はなされていない。私達日本人が知りたいのは、何故英語の母国語話者は「X rob 被害者 of 略奪品」を論理的、「* X rob 略奪品 from 被害者」を非論理的と感ずるか、である。

結論からいえば、金杉が論じるように‘rob’構造の奇妙さは、意味論的立場に立って初めて説明可能であろう。‘X steal Z (from Y)’と‘X rob Y [of Z]’の二つの構造が現代英語に普通に存在している以上、意味とは何か、を明確にしなければならないけれども、「形式 (form)」が異なれば「意味 (meaning)」が異なる」という Dwight Bolinger の考えを、素直に受け入れるべきであろう。

平井美津子の「日本人の可算、不可算観」は、フィールド・ワークと日本の英語教育のあり方について論じたものである。平井は薬大を卒業した関係から医療関係文書の日本語から英語への翻訳を副業としてきたため、絶えず英語と接してきた。ところが、自分が英訳した文のネイティヴチェックを受けると冠詞に関して問題が生ずることがしばしばあるという。そこで彼女が考えたことは、冠詞は常に名詞（句）と接合するものであるから、ひょっとして、これは日本人の英語の名詞のとらえ方に問題があるのではないか、という疑問を持つに至った。これが日本人の可算、不可算観につながるのだが、この疑問が、ある意味では、日本での英語教育の現場に投げかける影響は大きい。というのは、このことは以前からよく「英語に強くなりたければ英語

で考えよ」といわれてきたことにつながるからである。しかし、この提言は誤解を生みやすい。何故なら、昔も今も、独特の文化を持つ日本で育ってきたものには日本的考え方がしみついているのに、その日本人がどうして異なる文化の中で育った人間と同じ考え方ができるのか、という日本人が存在するからである。しかしこの提言を好意的というか積極的に解釈すれば次のようにもなる。「日本的考え方、物のとらえ方はそれはそれでよい。しかし文化の違う異国の英語を学習する際には日本語感覚から英語をみるのではなく、英語を英語としてながめ、日本語を切り離しなさい」ということである。平井はこの点を強く主張すると同時に過去において大学卒業者の極めて多数の（というより、長年英語教育にたずさわってきた私にとっては予想以上の）日本人が日本語を通して英語を学習してきたにちがいないことをデータをもとに実証している。机上の空論とちがひ、データは現実の姿を如実に写し出している。中学、高校、大学で計10年間英語を習って（？）きたが、それでも満足に冠詞を使えない日本人、英会話となるとすぐ逃げ腰になる日本人、にとっては、信じられない程の短期間でかなりの程度の日本語の能力を身につけるような英米人は、おそらく（テキストや教授法そのものは別にして）自国語を通して日本語を学習するということを行っていないのではないか、ということまで金杉（pp. 34～55）、平井（pp. 24～33）は示唆している。

I. 論理とは何か？

英語と日本語の対照研究をする時、たいていの場合、必ず問題として取り上げられるのが、どちらの言語が論理的か、ということである。そして必ずといっていいほど、英語の方が論理的であるという結論になっている。この種の論文や著書の中には英語のもつ論理的側面のみをとり上げ、日本語についてはその非論理的側面のみをとり上げて両者を対照させるものだから、当然英語の方が論理性の高い言語ということになってしまうものが多い。しかし、このようなやり方はフェアとはいえない。批判を覚悟で極端ないい方をする、 $2 + 3 = 5$ と $2 + 3 = 4$ をくらべて前者の方が筋が通っているというようなもので、最初から論理的なものと非論理的なものをくらべれば、論理的な方が論理的であるのは自明の理である。仮りに百歩譲って英語が論理的で日本語が非論理的であるとしても、このような結論から一体何が生まれるというのか、と私は常々思っている。そして、このような結論を導き出している論文や書物では、意識的にせよ無意識的にしろ、必ず英語における論理を基盤、基準にして日本語をながめることを行っている。つまり、最初から英語の論理性に対する思い入れが強いのであって、この点に関しては対照研究の場合、我々は十分に注意しなければならない。これが逆の場合でも全く同じことで、日本語の論理性を標準にして英語をながめれば、比較研究にもならない全く別種の言語である英語には、日本語の論理に合わない現象がいくらでも出てくるだろう。こういういい方をする対照研究は成り立たないのか、という疑問が出てくるかもしれないが、私は何もそういうことをいっているのではない。英語と日本語の論理性の優劣を決めても意味がない

といっているだけなのである。私が思うに、もし英語と日本語の論理を対照させようとするなら、両言語の類似点と相異点をありのままに記述することが、客観的で最も無難な結果につながるのではないか。何故私がこのような主張をするかは実に簡単で、英語と日本語の論理を論ずる際の共通の基準になるようなものは何もないと考えるからである。この具体的例は後述する。

ここまで「論理」という言葉を何度か使ってきたものの、この言葉が一体どのような概念を表わすのかを明確にしていないのには理由があって、そもそもある語や表現が表わすもののとらえ方は個人によって多少なりとも異なるものであり、この傾向はそれが抽象的概念の場合には一層強くなると私自身思うからである。とはいえ、どんな言葉や表現にも一応の社会的な解釈基準があるのも事実であるから「論理」という言葉がどのように一般にとらえられているのかをみてもみることも必要であろう。

論理 (logic)

①思考の形式・法則。また、思考の法則的なつながり。

②実際に行われている推理の仕方。

論理のすじみち。

(『広辞苑』新村 出編、第四版、岩波書店、1991。)

logic

1 The science of reasoning by formal methods

2 a way of reasoning

3 *informal* reasonable thinking

(*Longman Dictionary of Contemporary English*, P. 644. 1978.)

上記の定義から日本語英語を問わず、「論理」及び logic とは「筋（みち）が通っていること」と同義であると考えてよいだろう。したがって、本稿では「論理」をこのような意味で使う。

前述の「英語と日本語ではどちらが論理的言語か」の問題にもどるが、この問題はへたをすると收拾がつかなくなったり、またこれも前述したように、一方の国語の論理から他方を論ずるという落とし穴に陥りやすい。が、冷静に考えてみれば、極めて単純に処理できる問題でもある。そのようなことはできない、というのがその答えである。ただ、できるとすれば、英語なら英語、日本語なら日本語というように、ある特定言語を取り上げて、その言語内にもどのような論理的な部分があるか、非論理的な部分があるかを論ずるだけである。つまり、あらゆる言語を横一列に並べてその論理性を論ずる共通した判定基準などあるはずがないということである。いかなる言語にもそれなりの論理性があり、ただそれが他の言語の論理には合わないことがごくしばしばあるというだけのことである。例えば、英語と日本語を比べようとする時に必ずもちだされる単数、複数の概念がそうである。英語では単数の場合 a book だが、複数になると two books、three books のように名詞の語尾に屈折変化が生じるが、日本語の場合、一冊の本、二冊の本、三冊の本、のように名詞は何ら変化せずに同形のままで使われる。英語でも日本語でもそうするのが規則になっているだけのことであって、他に理由はない。この現象をみて英語の方が論理的であるというのなら、two、three ですでに複数の概念が表わされているのだから、ことさら複数の意味を持つ '-s' をつけること自体余分な操作をしている、専門的に言うところ余剰的 (redundant) なことをしているという点で筋が通っていない、つまり論理的でないという見方も成り立つ。

とはいえ、私は個別言語がすべての面において論理的であるというつもりもない。どこの国の言葉にも論理的な面と非論理的な面の両方が共存していることは事実である。例えば英語では It's I. というのが本来論理的な言い方だが、この言い方は余りにも文法的規則に従い過ぎた形式的なものともみなされ、今日では It's me. が日常的なごく普通のいい方になっている。It's me. の方が普通であるということはそれに対して英語の母国語話者は何ら違和感も不自然さも感じないということであり、そこに論理性など持ち込ま

ない。言語とはそういうものであって論理性のみで成り立っているものではないという認識が我々には必要ではないか。日本語でも同じことがいえるのであって、「お湯をわかす」という表現だって論理的にはずい分おかしい方である。お湯は正しくお湯であって、それをわかすというのは論理に合わない。論理的には「水を加熱してわいた状態にする」という方が正しいのだろうが、日常頻繁に生じるこのような状態を述べるのに、日本人は論理的ではあるが冗漫ないい方よりも簡潔さの方を取り、お湯をわかすという。つまり、ここでは論理性よりも経済性に重きが置かれているのである。くり返すが、これが言語なのだ。

日英の対照研究、それも両国語の事実をそのまま記述することはもちろん可能である。以前にこのようなことがあった。私が著した和文英訳のテキスト用の手引きの試訳をアメリカ人にみてもらった時のことである。以下に和文と私の試訳を示す。

久しぶりに家族サービスをと思い、みんなで外食に出かけた。そのレストランはムードがあって、料理もおいしく、とても楽しい夕食だった。

I took my family out to dine together because I wanted to do something nice for them after a long interval. The restaurant had good atmosphere and all our orders were very delicious. We enjoyed our dinner very much.

問題は和文の「そのレストラン」と英文の 'The restaurant' である。そのアメリカ人は即座に 'The restaurant' を 'The restaurant we went to' と改めた。彼にとっては 'The restaurant' といわれてもどこの限定的なレストランか分からないいう。彼によれば、一軒しかないレストランが行きつけのレストランならもとのままでよいという。私の英文は日本語的発想からでたものであり、身にしみついた「行間を読む」の典型的な例といえる。も

ちろん英語にも ‘to read between the lines’ という表現があるのだから英米人も行間を読む習慣があるのも事実であろうが、私のような例をみるにつけ、行間を読む傾向は日本人の方がはるかに強いように思える。日本語の「あうんの呼吸」などその最たる例ではなからうか。これと全く対照的なものとして英米人はあいまいさを好まずできる限り物事を明確にすることを好む傾向が極めて強いといえる。その一例として以下に William M. Dorrance の著書 (*Opening the Door to Living American English*, 英宝社, 1989. pp. 21-22) からの一節を挙げる。

There is one last part of this course I need to talk about. Since this part is not directly concerned with this course's main purpose; (i.e. How you can improve your hearing comprehension to a point where you can begin to understand the English heard in movies and on TV), I consider it to be optional, depending on whether you have time or the inclination to use it. When you begin reading the explanations in each lesson, you can't help but notice a lot of sentences or parts of paragraphs set in parentheses, with underlining, or with both parentheses and underlining. Throughout this text's narration I have consistently used *underlining* to indicate “effect” (the fact the [sic?] something has happened or come into existence) and *parentheses* to indicate “cause” (the reason why something has happened or come into existence). And when a part of a sentence or paragraph is set off with *both parentheses and underlining*, it indicates that **that particular “effect” is also the cause of some different effect.**

The reason I have chosen to emphasize or mark clearly all the “cause and effect” parts of the narrative explanations is simple: You can not completely understand the vernacular language of any English-speaking people unless you can understand the important role cause and effect plays in virtually every naturally spoken-English dialogue. This is

because of the tremendous influence “cause and effect” has had in determining our Western way of thinking to the point where it is impossible to understand American thinking in particular and Western thinking in general, without understanding the influential role of cause and effect in shaping that thinking. And, after all, it is a nation’s thinking that ultimately shapes its way of using its language, so please study also the narration from the point of view of understanding the relationship between the many kinds of “effect” and their corresponding explanations of “cause.”

日本人はこの点、英米人ほど ‘cause-effect’（因果関係）にこだわらない。
例えば

A：「2週間無断で休んですみません。ひどい流感にかかって寝ていました。」

B：「あ、そう。お大事に。」

のような文脈ではAの発話内容の二つの文の意味のつながりは日本語では普通であるが、英米人ならそれを因果関係が明確になるような表現の仕方をするだろう。

以上で当初の問題点が十分に明らかになったと思う。対照研究には心して取り組まねばならない。

Ⅱ. 日本人の可算・不可算観

(典型的日本人の英語感覚の一考察：
今後の英語教育を念頭において)

〈はじめに〉

60名の日本人から得たデータをもとにして、「国際社会」とか「世界は一つ」といわれるこの時代に真の国際人として育っていてもらわねばならない若い人たちに、英語の基本をしっかりと教える必要性を訴えることが本稿の目的である。

〈具体例〉

日本語の名詞には英語におけるような明確な「可算性」、「不可算性」というカテゴリーが存在しないため、日本人にとってこの区別は非常にやっかいである。しかし、“てんぷら”が“tempura”として不可算名詞、“きもの”が“kimono”として可算名詞のカテゴリーで英語に溶け込んでいるように、日本語の名詞が一度外来語として英語の語彙目録に入ってしまうと、その時点から必ず「可算名詞」または「不可算名詞」のいずれかのカテゴリーに入るのは周知のことである。しかし多くの日本人はこの英語の名詞のとらえ方が不十分なため、その延長線上にある冠詞の使用さえもあいまいになり、実社会の場においてしばしばトラブルが発生しているのが現状である。

今回、「典型的（この意味は後述）」日本人を対象に即時不意打ち調査法にて調査を行い、実際の英語感覚の具体的一例を“名詞”の観点からとらえ、具体的に数字で提示することにより現実を直視し、同時にその問題点がどこにあるのかを分析し考察した。

〈調査対象〉

24～45歳までの典型的日本人で、日本国内で大学まで英語教育を受けた大学卒社会人60名を対象とした。なお、被験者の選出にあたっては前出の条件を満たした社会人から無作為に抽出した。

〈調査方法〉

自然な場の中からデータを抽出することを目的とするため、即時不意打ち調査法（rapid anonymous survey）を用いて、被験者に下記のアンケート形式で質問した。当然のことながら、各被験者に対し無記名を原則とした。

調査では、被験者全員にアンケート用紙を配布し、即時応答後、用紙を回収した。アンケート内容は下記に示す通りである。

次の英文と日本語を読んで下さい。

- ① ☐ I received 2 mails this morning.
私はけさ郵便を2通受け取った。
- ② ☐ She gave me some advices.
彼女は私に2、3の忠告をした。
- ③ ☐ She has many furnitures.
彼女の家は家具が多い。

読み終わって何か感じましたか。

- a. 何も感じなかった。
- b. 疑問を感じた。

⇒その理由

--	--

〈調査結果〉

図 1 : 日本人の感覚 (被験者60名)

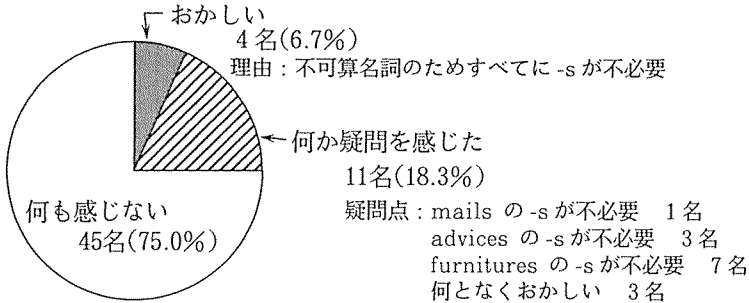


図 1 はその調査結果である。例文に何か疑問を感じた人は60名中11名(18.3%)であった。そのうち furnitures の '-s' が不必要と感じた人が7名、advices の '-s' が不必要と感じた人が3名、mails の '-s' が不必要と感じた人が1名、理由はないが何となくおかしいと感じた人(ピントはずれの答えをした人、3文のうち1文または2文あるいは3文全部に何となくおかしいと感じた人すべてを含む)が3名であった。これらの3名を含めてアンケート文に対してとにかく何らかの疑問を感じたと答えた11名の主な理由は「学生時代に先生から聞いたような気がした」であった。

一方、例文の名詞はすべて数えられないものなので、明らかにおかしいと答えた人は4名(6.7%)にすぎず、うち1名は大学時代英語圏への海外留学の経験があり、2名は塾の英語教師であった。

結局、例文に疑問を感じなかった人は60名中45名で、75%に達した。

〈分析〉

本調査を実施する前に、今回の調査対象となった60名のうち、さらに無作為に20代の大学卒社会人20名(前述の「おかしい」と答えた4名は除く)を対象に「I have an important information.」に疑問を感じるかどうかの調査を行ったところ、これに疑問を感じなかった人が20名中19名、95%にも達

した。これらの調査結果から、意外な数字が現れた原因がどこにあるのかを心理的、概念的に分析した。

1. 心理的要因

あらゆる面で最も感受性の強い青少年期に、英語の試験で “I have pen.” という “a” ぬきの答案を書いて減点された経験をもつ日本人は私を含めてけっして少なくないと思う。この減点に対しておそらく大抵の場合、“英語の名詞には冠詞をつける” というような stereotyped な教え方がされる。そのため一度失敗を経験した学生は、名詞には冠詞をつけなくてはまた減点される、という単純な思い込みをする。さらに学年がすすむにつれ、語彙が複雑化する。それに伴い文法も高度になることから、そちらに神経が奪われ、本当は同じように大切な名詞および冠詞のとらえ方があいまいなまま10年近くに及ぶ英語教育を終えることになる。ところが実社会に入ると、情緒的・文学的英語を要求されることはほとんどなく、簡潔明瞭な英語が常に要求されることになる。この時にあいまいなまま過ごしてきた名詞および冠詞の正しいとらえ方ができなかったつけがまわってくる。これらは日本人の思考の中であいまいな状態のまますごしたため、結局実社会で英語を書く段階になるとトラブルの発生源となる。

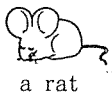
例えば、文脈に応じて { } 内のどのカテゴリーを選択するかによって結果が全く違うものになることは、次の図2の動物実験の例で明白である。すなわち日本語の“ラット”には数の概念が含まれていないが、一旦 “rat” に翻訳すると、明確な数の概念と文脈に応じた冠詞の選択が必要となる。日本語の名詞と英語の名詞の概念のとらえ方の差が、結果的には医薬品の開発に大きな影響を及ぼしかねないという現実の形となって現れてくる。

図 2 : 日本語と英語の名詞のとらえ方の実例

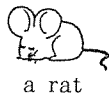
ラットに経口投与したA薬100mg/kgは投与後30分めの代謝プロフィールに影響を及ぼした。

A drug 100mg/kg administered orally to {a rat, rats, the rat, the rats} affected the metabolic profile 30 minutes after A drug administration.

Material



a rat



a rat



a rat



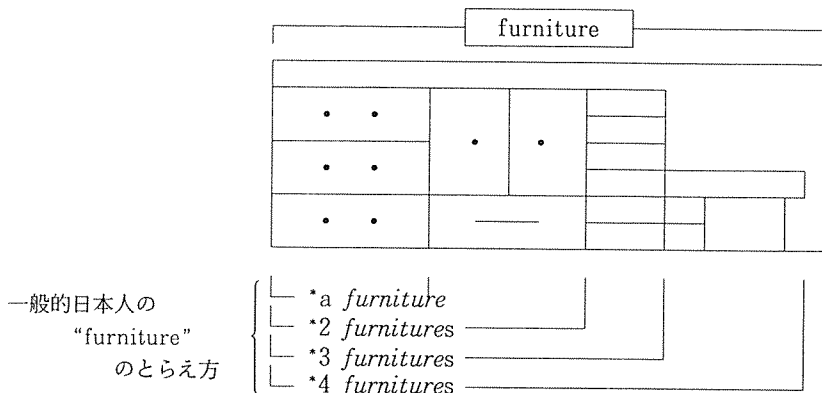
a rat (obese)

(obese rat: 実験用に太らせた肥満ラットのこと。代謝が遅い。)

2. 概念的要因

一般的に日本人は目にみえるものを一つひとつとらえる傾向にある。そのため、two books や three pens などの数詞を直接つけることのできる名詞には容易に対応できる。しかし一般的に日本人は、英語の集合的な名詞に対する感覚に欠けるため、このような名詞に対しても同じような対応をしてしまう傾向があるようだ。例えば“furniture”とは図3の下線部に示す部分となる。

図 3 : 日本人の“furniture”のとらえ方



すなわち日本人の感覚でいう “furniture” とは、「たんす」や「いす」などの何か一つひとつの家具のことで、そこには集合的な概念はない。同様のことが mail にもいえる。「mail=郵便(物)」であり、手紙1通いっ通が思い浮かぶため、3 mails に違和感を感じないことになる。

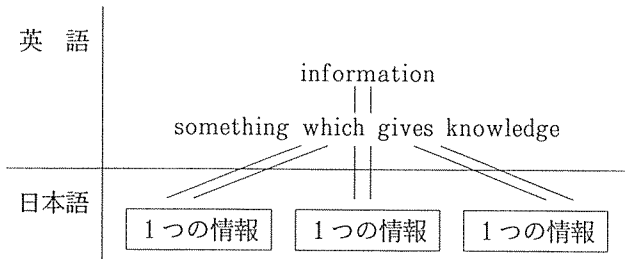
ところで、もっとやっかいなのが抽象的な名詞の場合である。“情報” および “information” についてそれぞれ国語辞典および英英辞典で調べると、

情報：(特別な関係で手に入れた) 当面必要とされる知識。状況に応じた適切な判断を下したり、行動をとったりするために必要とされる知識。

information: [U (about, on)] (something which gives) knowledge in the form of facts, news, etc.

と似たように記述されている。私自身がそうであったように、日本語を母国語とする人はわざわざ英英、国語両辞典で“情報”の定義を見比べてみようとしまいだろうし、また、たとえそうしたところで、「今日は会議で重要な情報を一つ得た」と日本語でもいえるものだから、英語の “information” に直面するとつい日本語的観点からとらえてしまう。前出の “mail”、“advice”、“furniture” と同様に、“information” という抽象的な概念をもつ英単語になると、日本人は日本語的観点から、“情報” という抽象的概念を、頭の中で、数えられるものとしてとらえ、したがって文法的にも可算名詞ととらえがちになってしまう。すなわち1つの情報、2つの情報というようにである。このことを図4に示す。

図4：“情報”と“information”



また“advice”に対応する日本語は国広（1981）によれば、図5に示すとおりである。この国広の分析を正しいと仮定すると、“advice”は個々の日本語のアイテムから成り立った集合的な概念であると考えられる。

図5：“advice”に対応する日本語

		意志にそむく	利益になる
私	的	忠 告	ア ド バ イ ス
公	的	勧 告	助 言

このように日本語の名詞と英語の名詞のとらえ方のずれは、特に不可算名詞の場合に大きいと考えられる。先程述べた心理的要因と共に、可算・不可算名詞という意味的カテゴリーを意識する習慣がついていない限り、極めて特殊な例（例えば、lay an information against a person: 法律用語で「人を起訴する」）を除き、日本人は英語では不可算名詞であるものに日本語の感覚から不用意に冠詞の‘a’や複数の‘-s’をつけてしまい、それに違和感を感じない傾向があることが上記の調査結果から十分推測できる。

忙しい受験勉強の中で私たち日本人は「information＝情報」と暗記する。‘information’を単純に「情報」と覚え込むことも一時期大切ではある。しかし、それが頭の中で固定観念化してしまうことに問題がある。常にinformationをinformationとして英語の範囲内でとらえることが必要である。つまり個々の特定の言語における名詞の考え方の基本的なルールを把

握した上で、その概念を意味的な空間の中で位置づけて考えることが重要なのである。このことは、教える側および学習する側共にかかなりの努力を要するが、この思考を習慣づけることにより英語の名詞のとらえ方もずいぶん変わり、文法的に正しい表現を生み出すことができるものと考えられる。

〈考察〉

今回の調査では、国内の企業に従事し、多かれ少なかれ英語に接する機会のある社会人を対象とした。「典型的」日本人としたのは、「対象を日本国内で大学卒業まで英語教育を受けた人のみに限定したこと」を意図し、帰国子女を除外したことを示している。その理由は、本調査は日本人の英語のレベルをみるためのものではなく、英語のごく基本的な部分である“名詞”のいくつかに焦点をあて、具体的に数字で表わすことによって、その問題点がどこにあるのかを分析しようという主旨のものであるからだ。上記の調査結果から、英語のネイティブ・スピーカーおよび日本人の英語研究者にとって、ある意味で意外な結果がでたと思われるかもしれないが、実社会の場で日本人の書く英文が海外で通用しにくいという現実を考慮すると何ら不思議ではない当然の結果といえよう。

先で述べたように日本語の名詞には、英語におけるような明確な「可算性」「不可算性」というカテゴリーが存在しないため、日本人の英語の名詞のとらえ方がどうしても不十分になりがちである。外山滋比古はその著書(1994)の中で、「動詞中心の日本語と違い、英語は名詞を軸に論理を展開する」と述べている。このことは英語の名詞の重要性と共に、その概念を十分身につけることの必要性を示唆している。さらに英語では名詞の延長線上には冠詞が常に存在する。名詞のとらえ方が不十分であるということは、当然それに伴い冠詞の使用も不十分となる。日本人の意識の中でふだんは非常に小さな位置しか占めていないであろう“a”や“the”が大きな現実と直面する。このことを私たち日本人が十分認識した上で、英語を学習する側は、英語をそのまま英語として受け入れる努力をし、一方教える側は、今後の英

語の教え方を考え直そうとする柔軟な姿勢をもち、さらに、難解な理論を尊重するのと同程度に、英語の基本的な部分をおろそかにしないという釣り合いのとれた姿勢を示せば、それが、ひいては感受性豊かな時期の学生の英語への興味をさらに高めるものと考えられる。また10年以上に及ぶ英語教育の結果を発揮するのは机上のみではなく、実社会の中でも必要である。そのため実社会を意識した英語教育とはどのようなものであるかを考えなくてはならない。この点、および日本語を基準に英語をみないようにする訓練をするという意味で上野(1993)の『大学実用英作文』などがその実践書となろう。また高等教育の場での具体的な方法について、鈴木孝夫はその著書(1983)の中で提言しているが、その要点を私なりに以下に示す。

1. 授業の目的が英語英文学の研究ではないのだから、テキストを克明に訓読註釈的に読む必要はない。何が書いてあるかをつかむことを主眼とし、習うよりは馴れろの態度で英語をどんどん使う。
2. 英語の教師は徹底的に英語を使って授業すべきである。何かにに関して、即座にまとまったことが英語で書けること、言えること、これを現在の大学における英語の授業の目的とすべきである。
3. 外国語を上達させるためには、文学作品をたくさん読むのがいいという神話を壊さなければならない。教科書では外交、政治、経済はいうまでもなく、歴史、文化一般、宗教と広く話題を選ぶべきである。

さらに鈴木は外国語を学ぶということの目的として、自国語では得られない知識を吸収すること、国際的な場面で外国人とコミュニケーションを図ることと同時に、日本語で生まれ育った私たちとは違う考えをもつ人が存在し、彼らが全く別の目で私たちを見ているという事実を学生たちに知らせてやることが重要であるということを述べている。

あらゆる意味で変革を求められている現代日本において、現在、真の国際社会の一員としての役割を果たす手段としての“英語教育”のあり方につ

いて考え直す時期であり、本論文がその問題提起の一助となることが望まれる。

参考文献

- Close, R. A. (齋藤俊雄訳) (1988⁷): 『クローズ現代英語文法』、研究社。
- Crystal, David (風間喜代三他訳) (1992): 『言語学百科辞典』、大修館書店。
- 国広哲弥他 (1981): 『日英語比較講座 3 意味と語彙』、大修館書店。
- 黒田和雄: 'Shades of Meaning Created by the Use of Articles in English'
『語学研究』 36号、1984年1月。
- 黒田和雄他 (1986): 『英語は冠詞で完成する』、リーベル出版。
- Petersen, Mark (1991²⁶): 『日本人の英語』、岩波書店。
- Petersen, Mark (1990⁴): 『続日本人の英語』、岩波書店。
- 斉藤武生他 (1984): 『講座学校英文法の基礎 3 冠詞・形容詞・副詞』、研究社。
- 柴谷方良他 (1989): 『英語学大系 6 英語学の関連分野』、大修館書店。
- 鈴木孝夫 (1994⁴⁰): 『ことばと文化』、岩波書店。
- 鈴木孝夫 (1983²⁰): 『閉ざされた言語・日本語の世界』、新潮社。
- 多賀敏行 (1991): 『国際人の英語』、丸善。
- 武本昌三 (1993): 『英語教育のなかの比較文化論』、鷹書房弓プレス。
- 外山滋比古 (1994⁷): 『英語の発想・日本語の発想』、日本放送出版協会。
- 上野義和 (1993²): 『大学実用英作文』、英宝社。

辞書

- Longman Dictionary of Contemporary English* (1992), Longman。
- 『新明解国語辞典』(1981)、金田一京助他、三省堂。

Ⅲ. ‘X rob Y [of Z]’ 構造

動詞 ‘rob’ は英語の動詞の中でも特異な統語構造を持つものの一つで、通例、(1)のような三項動詞として現われる。

(1) X rob Y of Z

直接目的語の変項Y には「人物」（または「場所」）を表わす名詞句が、そして前置詞の目的語の変項 Z には「奪われる対象物」を表わす名詞句がそれぞれ生じなければならない。そしてまた、上で述べたような名詞句表現であれば必ず変項 Y、Z を満たすことができるのかということ、そうではなく、それぞれの項には意味的制約が課される。

これに対して、類義語 ‘steal’ の場合は ‘X steal Z from Y’ のように「盗まれる対象物」を表わす名詞句が直接目的語の位置に生じ、「人物」、「場所」を表わす名詞句が前置詞 ‘from’ によって表わされているため、この構造は ‘rob’ 構造に比べて何の抵抗もなくすんなりと日本人の頭の中へ入ってきやすい。しかし、‘rob’ 構造の場合、どうして「人物」、「場所」が直接目的語の位置に生じかつ「奪われる対象物」が前置詞 ‘of’ によって表わされなければならないかは、英語を母国語としない我々にとっては違和感さえ覚え、理解しにくい所である。したがって、本稿では ‘rob’ の統語的特性、そして、さらにはこの動詞のもつ意味的特性から必然的にいろいろな事柄が要求されること、そして、そのような事柄が文中での他の語や句との結びつき、すなわち、統語構造をも決定することを語彙・意味論的に分析する。そ

して最後に、(1)において、何故その「奪われる対象物 (= 変項 Z)」を表わす時に前置詞 'of' が出現するのかを歴史的にそして意味論的に分析する。

—— I ——

I - 1 〈'rob' の統語構造〉

'rob' は次のように前置詞 'of' が必要とされる。

(2) The Daltons robbed $\left\{ \begin{array}{l} \text{the bank} \\ \text{the stagecoach} \\ \text{the rich} \end{array} \right\}$ of a lot of money.

(3)* The Daltons robbed a lot of money from $\left\{ \begin{array}{l} \text{the bank} \\ \text{the stagecoach} \\ \text{the rich} \end{array} \right\}$.

(2)と(3)の文法性の判定結果の相違から 'rob' は前置詞 'from' によって交替形 (alternation) ができないことがわかる。つまり、'rob' の直接目的語の位置に、もし「奪われる対象物」が置かれてしまうとその文は非文となる。従って、'rob' の直接目的語の位置には必ず「人物」(または「場所」)を表わす名詞句が生じなければならないことがわかる。¹

I - 2 〈'rob' の意味論的考察〉

'rob' の変項 Y には「人物」(または「場所」)を表わす名詞句が満たされなければならないことは前述した通りであるが、「人物」を表わす場合と異なり、変項 Y が「場所」を表わす場合、次の例文(4)が非文となっていることから、ある特別な意味的制約を受けることがわかる。

(4)*He robbed the safe of its contents.

(Goldberg(1992,P.43))

(4)が非文法的であるのは‘rob’の変項 Y が「場所名詞」であっても、そこには本来、人物がその背後に存在することを示唆、暗示していると考えられる名詞句が満たされなければならないという意味的制約が課されているからであろうと考えられる。つまり、‘safe’のような「現金」または「貴重品」などを閉っておくためだけの場所しか示しえない名詞が置かれることで意味的制約に違反することになる。したがって、次の文も同じように非文となる。

(5)*They robbed the coin-op locker of its contents.

これらのことから、変項Y は「人物」または「(人物がその背後に存在することを示唆や暗示していると考えられる) 場所」という意味的制約が課される。

次に、‘rob’の変項Z について考えてみることにしよう。

この変項Z も、Y と同じように意味的制約を受けなければならないことは、次の(6)

(6)*I robbed John of a penny.

(Goldberg(1992,P.41.))

から明らかである。(6)が非文である理由は、「奪われる対象物」である ‘a penny’ に起因する。このことは次の例文(7)、(8)が正文であることから明白である。

(7) I robbed John of his last penny.

(ibid)

- (8) I robbed John of a penny he treasured.

すなわち、Johnがたった「一ペンス」のお金を奪われても、彼自身には全く痛くもかゆくもないので、何の被害者意識も持たず、したがって、心理的に影響を被ることがないためであろうと考えられる。しかし、(6)の文に、
'last', 'he treasured' のような修飾句が付け加えられた(7)、(8)の文は正文となる。(7)では「最後の一ペンス」、(8)では「彼がとても大切にしていた一ペンス」が奪われてしまったことになり、Johnが被害者として受ける心理的影響力は(6)に比べてはるかに大きくなる。故に、このようなことが要因となって、(7)、(8)は正文になっていると考えられる。

さらに、上で述べた意味的な条件さえ満足すれば、変項 Z には、次のように「抽象物」を示す名詞句が生ずることも可能である。

- (9) Those cats robbed me of my sleep.

(OALD (1989, P.1095) S.V.rob)

「睡眠」を妨害されることで、変項 Z の 'me' が心理的に大きな影響を被ることは、我々の日常生活では十分に想像されうることである。

以上、述べてきたことから、変項 Y、Z には以下のような意味的制約が課されると結論づけてよいであろう。

- (10) Y: 「人物」「場所」(ただし、人物がその背後に存在することを示唆、暗示している場所名詞)

- (11) Z: 心理的に(深い)影響を被るのに見合った「略奪物」を表わす名詞

このような変項 Y, Z にそれぞれ課される意味的制約は ‘rob’ の意味特性に由来するものであることには間違いない。

I - 3 〈‘rob’ の語彙概念構造〉

‘rob’ の意味特性に注目してみると、その共起すべき副詞との間には、密接な意味論上の関係があるようである。そこで、‘rob’ と色々な意味の副詞との共起関係をみてみよう。

(12) The James gang robbed the bank of a lot of money

$$\left\{ \begin{array}{l} * \text{silently} \\ * \text{secretly} \\ * \text{slyly} \\ * \text{unthreateningly} \\ \text{threateningly} \\ \text{violently} \end{array} \right\} .$$

(12)におけるように、「脅迫的」「威嚇的」「暴力的」(以下、「脅迫的」で代表)などのような意味の副詞とのみ ‘rob’ は共起できることがわかる。したがって、前述したような変項 Y, Z に課される意味的制約と ‘rob’ と副詞との共起関係から、以下のような ‘rob’ の語彙概念構造が考えられる。

[Rob: [X **cause** [Y to come into a certain state of being negatively influenced (usu. with threats or violence)]] **in order to** [X get Z from Y]

ところが、LDCE (Longman Dictionary of Contemporary English) には、‘rob’ について以下のように記載されている。

rob: to take the property of (a person or organization) unlawfully,
with or without violence or threats....

(LDCE(1978,P.960)S.V.rob)

‘rob’ には必ず violence / threats が伴う行為であるのに、この記載にした
がうと、次の(13)は正文となる。

(13) Jesse James robbed the bank of a lot of money without threats
/ violence.

実際、上の(13)の文は informant によっても正しい文と判断される。一体、
この文が成立する状況とは、どのようなものであろうか。何の武器も持たず、
また脅迫的な言葉もなく、ただ、銀行に入って行っただけで、相手が黙って
お金を渡すということが現実には可能かどうか考えてみればよい。普通、銀行
から現金を強奪する場合、その犯人 (robber) は相手を脅迫または威嚇する
ために、銃などの武器を持って脅迫または暴力を加える場合で、誰でも心理
的に深い影響を被る。しかし、銀行から現金が強奪されるのはこのような状
況に限られるものではない。たとえば、(13)の文で、Jesse James のような
悪名高い人物 (銀行強盗として名を知られていた) が銀行に入っただけ
で、犯人 (行為者) が脅迫も暴力も何もしていないのに、被害者が脅迫感、
恐怖感を持ち、現金が奪われる場合も十分考えられる。結局、(13)の文が成立
する状況は、犯人が具体的に脅迫または暴力行為をしなくても、被害者の側
が自から脅迫感を持って、現金が奪われる場合であると考えられる。

つまり、この辞書記載の意味するところは行為者側の視点に立てば、具
体的に脅迫または暴力行為がある場合とない場合というこのような二つのケ
ースを考えて記載してあると考えられる。いずれの場合にしても、被害者側が
脅迫感を持ち、心理的に影響を被るのに変りはないと考えるべきである。

まとめると、以下のようになる。

with violence/ threats

犯人が具体的に武器を持って、脅迫または暴力を加えて現金を奪う場合

without violence/ threats

犯人が具体的に脅迫または暴力を加えてないのに、被害者側が脅迫感を持ち現金が奪われる場合

LDCE の記載を考慮に入れると、‘rob’ の語彙概念構造は以下のように修正される。

Rob: { X **cause** (usu, with violence or threats) [Y to come into a certain states of being negatively influenced)] **in order to** [X get Z from Y]

I - 4 〈‘from’ の編入〉

‘rob’ の語彙概念構造においても示されているように、‘rob’ には起点の前置詞 ‘from’ が「編入 (incorporation)」されていると考えることができる。これに関連して、Gruber (1976) の主張を概観してみようと思う。

次の文をみてみよう。

(14) John walked from the park to his house.

(14)においては、起点を示す ‘from’ と到達点を示す ‘to’ が用いられていることから、(14)が表す命題は、「John は公園を起点として、到達点である彼

の家へ歩くことによって移動した」であり、それによって John の物理的移動（physical motion／transition）が表現されている。また同じように、次の(15)においても、

- (15) The ball rolled from the hill to the bank.

この命題は、「ボールが丘を起点として到達点である土手へ移動した」で、ボールの丘から土手への物理的移動が表現されている。このように「‘from’ + ‘to’」は、必ず、物理的移動の概念を表わせるものである。² これに加えて、Gruber (1976, P.37ff) は具体的に「‘from’ + ‘to’」によって物理的移動が表現されることの他に、「抽象的移動」(abstract motion／transition)をも表現することができると述べている。

例えば、

- (16) His attitude changed from belligerent to fairly composed.

- (17) Bill converted from a Republican to a Democrat.

(16)、(17)では、それぞれ、「態度」、「主義」の変化という抽象的な移動の概念が表現されている。このように、(14)、(15)では物理的移動の概念が、(16)、(17)では抽象的移動の概念がそれぞれ表わされている。³

次に彼は、‘give’、‘sell’ という動詞を取り上げて、(18)、(19)においては物理的移動と抽象的移動の両概念が表現されていると考える。

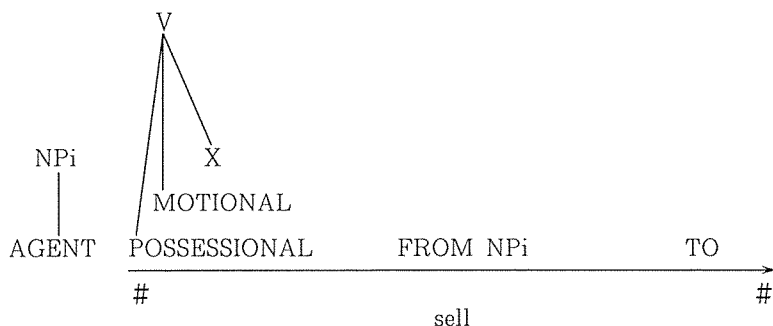
例えば

- (18) John gave a book to Mary.

- (19) John sold a book to Mary.

(18)、(19)では、実際に本の物理的移動と同時に抽象的移動、つまり「所有の移動 (transition of possession)」も表現されていると主張する。(18)、(19)では、「所有」という概念が主語の John を起点として、到達点である Mary へ移動していると考えられるわけである。しかし、物理的、抽象的移動というものの概念を表わすためには、必ず起点と到達点を表わす 'from' と 'to' が共起しなければならない。言い換えると、'to' がある以上、そこには起点を表わす 'from' が前提として存在していなければならないことは今まで述べてきたことから明らかである。⁴ そこで、Gruber は 'give', 'sell' には 'from' が編入されていると考える。例えば、'sell' については以下のようなダイアグラムになる。

(20)



(Gruber (1976, P.44))

(19)においては、本の所有が John から Mary に移動しており、その際、起点は John で、到達点は Mary である。NP_i-AGENT の NP_i と FROM NP_i の NP_i は当然同一人物を指す。また、動詞 'donate', 'teach' についても同じように分析される。

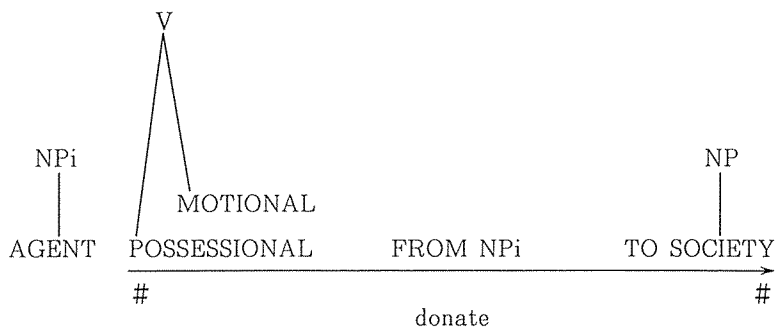
(21) *John donated money to Bill.

② John donated money to the Red Cross.

‘donate’ については、①、②の文法性の判定結果の相違から、到達点は‘SOCIETY’を示すものでなければならないことがわかる。

したがって、ダイアグラムは

③

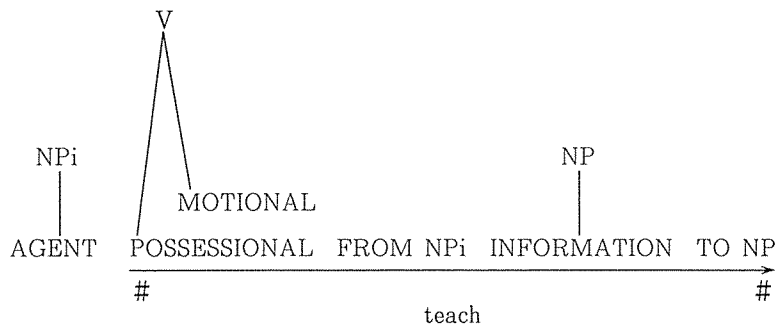


(Gruber (1976, P.125))

になる。‘teach’については、以下のように、意味構造の④が統語的具現化④として

④ John taught the story to Bill.

⑤



(Gruber (1976, P.126))

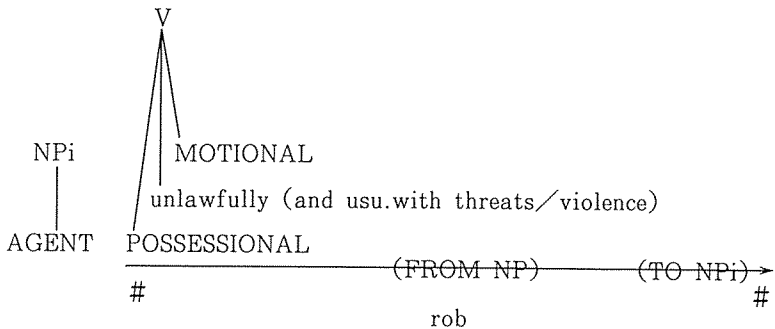
表わされる。

さて、このような彼の主張に基づいて本題の ‘rob’ について考えてみよう。例えば、

②⑥ Jesse James robbed the bank of a lot of money.

②⑥においても、「大金の強奪行為」の結果として現金の物理的移動が生じたと考えられる。そして、同時に現金の所有が初めは銀行であったものが、非合法的であれ、最終的には James の所有になってしまったと考えられるので「所有」という抽象的移動の移り変りがここにも存在したと考えてもよいであろう。このようなことから、‘rob’ の意味表示は以下のようになると考えられる。

②⑦



Gruber の主張に基づけば、‘rob’ にも ‘from’ が編入されていると考えるのはきわめて妥当であると考えられる。⁵

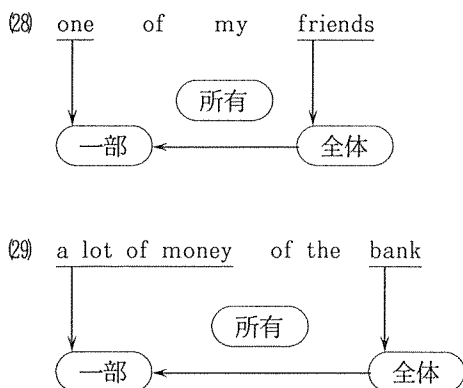
以上のことより、‘rob’ の直後に起点である「被害者」が生じなければならないのは上に述べたように ‘rob’ に ‘FROM’ の概念が内包されていると考えることによって説明されるだろう。また、次章で述べるように、「奪

われる対象物」そのものが前置詞 ‘of’ の助けを得なければ表現されることができないことから、‘rob’ は本質的には二項又は三項動詞とも考えられる複雑な側面を持っているように思われる。⁶

—— II ——

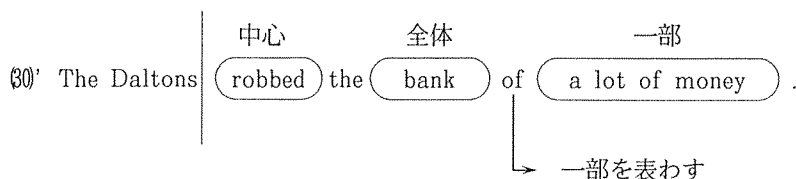
〈‘of’ の意味機能〉

‘rob’ と唯一共起しうる前置詞 ‘of’ の意味機能は何であろうか。以下の図をみると、



28、29における ‘of’ の意味機能はそれぞれの図が示すように、「全体と一部」の関係を表わすものであり、それと同時に「所有」の関係を表わす前置詞ともいえる。しかし、30 30' に示されているように

30) The Daltons robbed the bank of a lot of money.



「全体と一部」の位置関係が逆転している (cf、図29)。ここで、この現象を説明するための糸口として、'rob' の歴史的事実をみてみよう。

'rob' の起源は1200年頃であり、初出例は以下のようなものである。⁷

(a) C 1230 (? a 1200)...as þe þe seið to þe cniht þe robbed his poure men.

(MIDDLE ENGLISH DICTIONARY)

(1985,P.765)S.V.rob)

現代英語に直してみると、

as he who seizes to the knight that robbes his poor men.

上文から明らかなように、'rob' の直後に「被害者」の名詞が置かれているだけで、「略奪物」は出ていない。そこで、「略奪物」を表わすためにはどうしても前置詞の助けが必要となってくるのである。その前置詞とは上で述べた「全体と一部」を表わす 'of' であると考えられる。つまり、'rob' の直後には「全体」を表わす名詞が置かれていて、その「全体」から「一部」である「略奪物」を奪い取るのであるから前置詞 'of' が置かれていると考えられる。③0' を例に説明すると、'rob' を中心に直接目的語の位置には「全体」を示すものが、そして次に「全体」と「一部」を表わす前置詞 'of' が出現して、最後に「一部」を表わす名詞が置かれていると考えられる。

しかしながら、ここで一つの疑問が生じる。たしかに 'of' は上で述べた

通り、「全体と一部」の関係を示す機能を果たしている。しかし、「of」は歴史的な観点からすると「off」の弱形なので「分離」（すなわち、「off」の原義）を表す「off」が「of」と交換可能ではないかということである。そこで③0の前置詞「of」を「off」と置き換えてみると、

③1) *The Daltons robbed the bank *off* a lot of money.

(cf③0) The Daltons robbed the bank *of* a lot of money.)

結果は非文である。つまり、「of」は「off」ほど「分離」の意味は強くないために「分離」の概念の[・]みを強調する③1)は非文になってしまうと考えられる。例えば、

③2) the door *off* the room

③2)は明らかに部屋とは「分離」した状態にあるドアを指すが、

③3) the door *of* the room

③3)の「of」は「off」の弱形であるから「分離」の意味が存在することは否定できないものの③2)におけるほど強くは感じられない。また、一方では、「分離」という概念は「一部（分）」をそれを含む「全体」からの「分離」であることに間違いはないので、「全体と一部」という概念も存在するといえる。つまり、③3)の「of」にはその先祖である「off」の原義、「分離」と同時に「全体とその一部」という両概念が共存すると考えられる。これは前出の

③4(=②8) one *of* my friends

についてもいえる。すなわち、前出の③0には「分離」、「全体とその一部」と

いう両概念が共存し、③1)には「強い分離」の意味しか存在しないことが、③0と③1)の文法性の判定結果の相違となって表われていると考えられる。

くり返すと、‘off’には「分離」の意味しかなく、‘of’には「分離」、「全体とその一部」の両概念が共存することは次の文

③5) The bank was robbed of a lot of money by the Daltons.

のように③0を受動態にしたときに、その両概念がより明確に強く意識させられることでも明らかである。

ここで、‘rob’以外に同じような構造をとる動詞を参考までに挙げておく。

③6) The tree *deprived* a house of light.

(その木が家から明りを奪った)

③7) Museums *despoiled* India of many priceless treasures.

(博物館はインドから多くの貴重な宝物を奪った)

③8) They *milke*d the snake of the venom.

(彼らはそのヘビから毒をしぼり取った)

③9) The thief *relieved* him of his wallet.

(その泥棒は彼から財布をふんだくった)

④0) Walking will *rid* you of some of that fat.

(歩けばいくらか脂肪が取れるでしょう)

④1) He *rifled* the safe of its contents.

(彼は金庫から中身を奪い取った)

(cf(4) *He *robbed* the safe *of* its contents)

(彼は金庫から中身を強奪した)

‘rob’ と (40)~(41)における各動詞との違いはただ単にそれぞれが持つそれ特有の意味の違いにしかすぎない。したがって、項構造の枠組みそのものは全く同じであると考えられる。これらの動詞の分析については稿を改めることにする。

本題に戻る。「全体と一部」の関係がより強く表現されていることについては、次の名詞複合表現が示すように、

$$(42) \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{bank} \\ \text{train} \\ \text{stagecoach} \end{array} \right\} \text{ robbery}$$

「全体」が略奪行為を示す名詞の直前に生じる名詞化構造によって表わされる。しかし、

$$(43) \quad \text{The } \left\{ \begin{array}{l} \text{burglars'} \\ \text{gang's} \end{array} \right\} \text{ robbery}$$

のように、「全体」も「一部」も全く表われない「行為者と略奪行為」だけが表わされる表現がまれにしか生じないことにも関係していると考えられる。¹⁰

また、上で述べた名詞化表現に関連して、(42)におけるように「全体」が略奪行為の直前に生じる場合が一般的であることは動詞 ‘rob’ は常に強奪される被害者に焦点 (focus) が当てられているというそのような相互関係に帰因するようである。

(44)* He robbed her of her watch in her room when she was out.

(45) He stole her watch from her room when she was out.

‘rob’ は被害者がその強奪行為と同時間にその場に存在しなければならないことは(44)が非文であることから明らかである。¹⁾ 類義語 ‘steal’ については(45)が正文であることからそのような制約はない。したがって、‘rob’ の場合、常に被害者が焦点としてとらえられるので、次の名詞複合表現の文法性の判定結果の相違は予測されることである。

(46) $\left\{ \begin{array}{l} \text{bank-robber} \\ * \text{bank-stealer} \end{array} \right\}$

(47) $\left\{ \begin{array}{l} * \text{money-robber} \\ \text{money-stealer} \end{array} \right\}$

‘rob’ の名詞化表現 ‘robber’ と共起できるものは、その焦点となっている「全体」を表わすものであるのに対し、他方 ‘steal’ は「部分」が焦点となっていることも上の例からわかる。すなわち、「全体」が常に焦点となっている ‘rob’ の場合、その名詞化表現では常に「全体」がその名詞の前に置かれることによって、「全体とその一部」の関係をより強く意識させているのである。

—— III ——

〈まとめ〉

‘rob’ は直接目的語の位置には必ず心理的影響を被る「人物」(または人

物を暗示させる場所)を表わす名詞が要求される動詞である。そして、‘rob’ という行為によって、所有の移動としての抽象的な概念も含まれると考えられることから、‘rob’の中には起点を表わす‘from’が含まれていると考えることができる。さらに、‘rob’の項構造については、‘rob’の直後には「全体」を表わす名詞、そして「全体と一部」、「分離」の両概念を表わす‘of’が現われて、最後に「一部」を表わす名詞が置かれると考えるのが妥当ではなかろうか。

「動詞の意味特性が統語構造を決定する」ことは以上の考察から明らかで、統語論と意味論が互いに独立して存在するのではなく、密接に関連した表裏一体の関係にあることがわかる。所詮、互いに助け合わなければならないものどうしであることはいうまでもない。

付 記

本稿を執筆するに当って、有益な議論、御助言を頂き、いつも激励の言葉をくださった上野義和教授（大阪外国語大学）に心から感謝の意を表わします。また、インフォーマントとして協力してくださった、ウィリアム・ドランス、ビバリー・ビショプ両先生（大阪外国語大学非常勤講師）にもお礼を申し述べます。当然のことながら、本稿の不備な点の責任は執筆者にあります。

注

- 1 ‘rob’の類義語‘steal’は直接目的語の位置に「盗まれる対象物」のみが要求される。

(a) Jesse James stole a lot of money from the bank.

(b)*Jesse James stole the bank $\left. \begin{array}{c} \text{of} \\ \text{from} \\ \text{off} \end{array} \right\}$ a lot of money.

Fillmore (1977, P.72ff.) の主張を採用すれば、‘steal’ の場合「盗まれる場所」よりも「盗まれる対象物」が常に ‘brought into perspective’ または ‘salience’ になるので常に(a)の形でしか実現できないと考えられる。

2. 例えば、上野義和 (1985) 「FromとTo」、『大阪外国語大学学報70-1』を参照のこと。

3. 池上嘉彦 (1987) 『「する」と「なる」の言語学』(大修館、東京)を参照のこと。

4. 上野義和 (1983) ‘A Study on the Modern

English Preposition and Verb-Adverb Combination’, 『言語変化』(研究社、東京)。

5. 図27において、‘FROM NP’, ‘TO NPi’ が線分上に置かれているのは、‘from’, ‘to’ が語彙化 (lexicalize) されて、文の中に表われてこないことを意味する。‘teach’ については、その対立概念である ‘learn’ を用いると24は以下の文にパラフレーズされる

24 John taught the story to Bill.

↓ ↑

24’ Bill learned the story from John.

すると、24’ では ‘from’ が語彙化されて文中に表現される。このような場合、‘from’, ‘to’ は線分より上に置かれる。

6. 二項動詞と考えられる根拠としては、次の文

They robbed the bank/train/stagecoach.

が成立することにあるが、

*They robbed me. ↔ They robbed me of the money. のように三項動詞とも判断される。

7. Jespersen (1927, P.242) は、次のような実例を挙げている。

Rob a person of his clothes | they robbed everything he had (now less common)

‘rob’ は元来、直接目的語の位置には「奪われる対象物」が置かれないことは OED, MED をみれば歴史的にも明らかであるので、Jespersen が挙げている 2 番目の実例は信憑性に欠けるように思える。

8. ウィリアム・ドランス、ビバリー・ビショップ両先生（大阪外国語大学非常勤講師）による。

9. the bereaved (肉親をなくした人(たち))、the deprived (恵まれない人(たち)) は存在するが、*the robbed は存在しない。

10. highwayman (追いはぎ) は英英辞典では次のように記載されている

a man who used to stop horseman and carriages...and rob them of their money.

highwayman の内心構造 (endocentric) は man であり、明らかに行為者を表わす。

しかし、‘robbery’ と結びつく名詞は行為者

*highwayman-robbery

ではなく「場所」つまり「全体」

highway-robbery

である。‘robbery’ と結びつく名詞の優先順位の中で「行為者」は最下位である。

11. The James Gang robbed the Union bank at night after all the bankers went home.

は成立するが、これは個人の場合と違って組織 (organization) の場合に限られる。

組織という抽象的存在物もしくは銀行などの物理的存在物そのものには、現実には脅迫行為は行えないけれども、もし、そこに人がいればその人が必ずや心理的影響を被る (negatively influenced) ことを ‘rob’ は示唆するものである。

〈参考文献〉

- Fillmore, C. (1977) 'The Case for Case Reopened' in *Syntax and Semantics* 8, pp. 59-81.
- Goldberg, A. E. (1992) *Argument Structure Constructions* Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Gropen, J et al. (1991) 'Affectedness and direct object: The role of lexical semantics in the acquisition of verb argument structure' in *Cognition* 41, pp.153-195.
- Gruber, J. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, New York, Amsterdam, North-Holland Publishing Company.
- 池上嘉彦(1987)『「する」と「なる」の言語学』(大修館、東京).
- Jespersen, O. (1927) *A Modern English Grammar: ON HISTORICAL PRINCIPLES*, PART 3, Heidelberg.
- 森田良行 (1994)『動詞の意味論的文法研究』(明治書院、東京).
- Rappaport, M and B.Levin (1988) 'What To Do with θ -Roles' in *Syntax and Semantics* 21, pp.7-36.
- 上野義和 (1983) 'A Study on the Modern English Preposition and Verb-Adverb Combination'『言語変化』(研究社、東京).
- _____ (1985)「FromとTo」『大阪外国語大学学報70-1』.
- _____ (1995)『英語の仕組み——意味論的研究——』(英潮社、東京).

〈辞 書〉

- 荒木一雄、安井稔 (編) (1991)『現代英文法辞典』(三省堂、東京).
- Cowie, A. P. et. al. (ed)(1989) *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Oxford Univ. Press, Oxford.
- Lewis, R. E. et. al. (1985) *MIDDLE ENGLISH DICTIONARY*, The

英語の論理 —その教え方と学び方—

University of Michigan Press, Ann Arbor.

Procter, P. et. al. (ed)(1978) *Longman Dictionary of Contemporary English*, Longman Group Ltd., New York.

